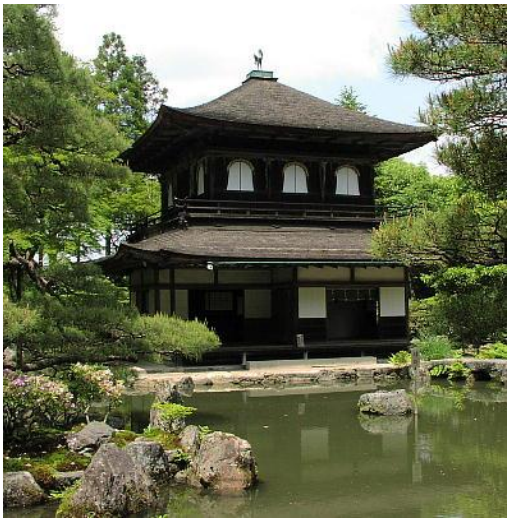
東山文化の誕生

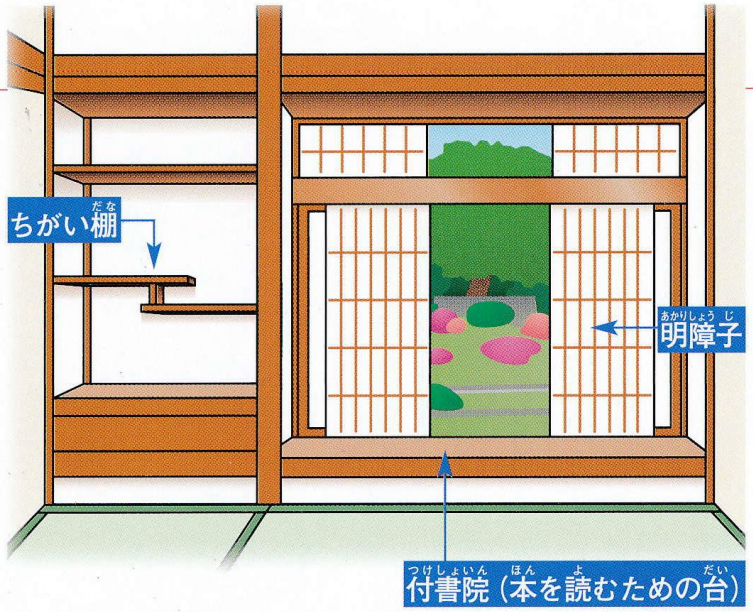
幕府の権力がおとろえ、政治がうまくいかなくなると、一四四九年（雪舟三十さい）八代将軍になった足利義政は、政治をそっちのけにし、自分の好きな芸術に力をいれました。そのため、この時代は政治はみだれましたが、文化が発達しました。義政が京都の東山に別荘をたてたことから、このころの文化を東山文化といいます。



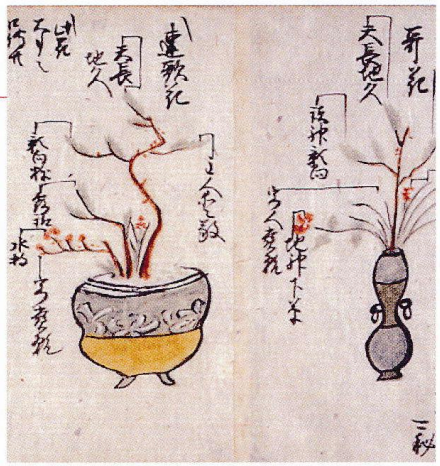
（写真提供：慈照寺）

東山文化を代表する建物の銀閣には、書院造という建築方法がつかわれています。障子やふすま、床の間など、書院造の特徴はいまの和室にうけつがれています。

このほか、茶の湯や生け花、枯山水などもさかんになりました。雪舟の水墨画も東山文化の代表です。この時代には、現在までつたわる文化が多く生みだされました。



書院造の部屋。室内にたたみがしきつめられているのも書院造の特徴。それまではたたみは部屋の一部にだけしかれていた。



室町時代にかかれたとされる生け花の本。生け花は、仏さまに花をそなえる儀式から発達したといわれている。

（『花王以来の花伝書』　室町時代　華道家元池坊所蔵）

足利義満が生きた室町時代

足利義満が活躍したころにさかえた文化や、室町時代の農村や都市のようすを見てみましょう。

権力の象徴、金閣

義満がたてた北山第は「極楽浄土をこの世にあらわしたようだ」といわれるほど豪華でした。たくさんある建物のなかでも、ひときわ美しかったのが金閣です。金閣は、もともと、おしゃかさまの骨をまつる舎利殿としてたてられました。外側だけでなく、内側にも金ぱくがはりつけられ、屋根の上には、金の鳳凰がかざられていて、金閣とよばれるようになりました。

金閣は三階だてで、一階は公家風、二階は武家風、三階は禅宗（仏教の種類のひとつ）風の建物になっています。公家、武家、寺院すべての上にたち、支配したいという義満の思いがあらわれていると考えられています。

金閣はまさに義満の力の大きさをしめす建物でした。

義満の死後、鹿苑寺という寺になった。現在の金閣は1955年にたてなおされたもの。

（写真提供：鹿苑寺　撮影：柴田明蘭）